

「児童・生徒の語彙の拡充・深化を目指した指導法の研究」

—— 形容詞に着目して ——

附属研究会国語部会（竹早地区）

小学校：浅見 優子 仙頭 理恵 宮崎 佐智子

中学校：赤荻 顕子 浅野 和子 川崎 正夫 鈴木 健一

目 次

1. 研究のねらいと方法	159
1. 1. ねらい	159
1. 2. 方法	159
2. 教科書の実態	160
3. 作文の実態	161
4. 授業実践	163
4. 1. 小学校での実践	163
4. 1. 1. 児童の実態	163
4. 1. 2. 実践	163
4. 1. 3. 成果と課題	165
4. 2. 中学校での実践	166
4. 2. 1. 生徒の実態	166
4. 2. 2. 実践	166
4. 2. 3. 成果と課題	167
5. 今後の課題	168
参考文献	168

「児童・生徒の語彙の拡充・深化を目指した指導法の研究」

—— 形容詞に着目して ——

附属研究会国語部会（竹早地区）

小学校：浅見 優子 仙頭 理恵 宮崎 佐智子

中学校：赤荻 顕子 浅野 和子 川崎 正夫 鈴木 健一

1. 研究のねらいと方法

1. 1. ねらい

「最近、児童・生徒の語彙力が落ちている。」という意見がある。私たちも、常日頃の授業や活動を通して児童・生徒に接していて、語彙力の低下を実感することが多い。

そこで、児童・生徒の語彙力低下の実態はどうか、また、それに対して私たち国語の教師はどうすべきかを検討しようということがこの研究のねらいである。

1. 2. 方法

まず始めに児童・生徒が書いた〈作文の分析〉と〈国語教科書における語彙の使用実態の分析〉を行い、児童・生徒の語彙力の実態をあきらかにしてみることにした。児童・生徒の作文を分析することで、子どもたちが使用している語彙の実態を明らかにできるのではないかと考えた。また、国語の教科書を分析することで、子どもたちが接する語彙の一端を明らかにすることができるのではないかと考えた。その際、今回の研究では、語彙力を形容詞という品詞に限定した。それは、形容詞が、語彙の中でも表現力に大きく関わる言葉であることから、着目してみることにした。

児童・生徒の作文の分析であるが、今回の調査のためではなく、日常的な作文指導として取り組んだ、文化祭的な行事である「竹早祭」の後に書いた小学校2・3・5年の作文と校外学習後に書いた中学校1・3年生の作文の中から形容詞を見つけ、出現数と語彙数を調べまとめた。（平成14年度）

次に、小学校・中学校で使用されている教科書（小学校は東京書籍、中学校は学校図書）の中から形容詞を見つけ出現数と語彙数を調べまとめた。（平成15年度）

さらに、作文と国語教科書から抽出された語彙を、阪本一郎『新教育基本語彙¹⁾』の「その単語を学習するにふさわしい学年ごとの分類」にしたがって分けてみた。『新教育基本語彙』を基にしたのは、その他にもいくつかの語彙分類の研究が発表されているが、語彙数の規模と分類の緻密さで、もっとも信頼できると考えたからである。まとめられたのが古いという欠点はあるが、十分現在でも通用すると思った。

以上の作業で形容詞をめぐる語彙の状況を明らかにする。その上で、そうした実態に対してどのような指導が求められているのかを検討していき、少しでも児童・生徒の語彙力の不足に対する提言をしていきたいと考えた。

2. 教科書の実態

平成15年度版の教科書（小学校は東京書籍、中学校は学校図書）における形容詞の使用の実態を調べてみた。下にその一部を載せておく。教科書の中に出現した形容詞を、表の学年の欄に○で示した。2回以上出てきても○1つとしてある。

	小1年	2年	3年	4年	5年	6年	中1年	2年	3年
あおい		○	○	○	○		○	○	○
あおじろい							○		
あかい	○	○	○	○	○	○	○	○	○
あかちやいろい								○	
あかるい	○	○			○		○	○	
あさい					○		○		
あたたかい	○	○	○	○	○	○			
あたらしい		○	○	○	○	○	○	○	○

あつい (暑い)		○	○	○	○	○	○	○	○
あつい (熱い)		○	○			○	○	○	○
あどけない									○
あほらしい							○		
あぶない			○		○			○	
あまい	○			○				○	○
あやしい							○	○	○
あらあらしい							○		
あらい					○	○	○	○	
ありがたい			○					○	○
いいづらい					○				
いい	○				○	○	○	○	○

やわらかい					○				○
よい	○		○	○	○	○	○	○	○
よろしい								○	○
よわい		○					○		
よわよわしい								○	
わかい				○	○		○	○	○
わかりにくい				○					
わかりがたい							○		
わかりやすい			○	○	○	○	○		○
わびしい									○
わるい			○			○	○	○	○

<表1>

これらを阪本一郎『新教育基本語彙』による分類に当てはめてみて、その出現数を数えてみた。『新教育基本語彙』は、19, 271語を「それらを学習することが望ましい学年段階とその重要度」に応じて分類している。<A>が「小学校1年～3年の段階」 が「小学校4年～6年の段階」 <C>が「中学校1年～3年の段階」で、Aが4, 300語 Bが5, 943語 Cが9, 028語を挙げてある。(なお、『新教育基本語彙』に載っていない形容詞、たとえば「人間らしい」「わかりやすい」のような複合形容詞や「子どもっぽい」のような口語表現がいくつかあるが、それらは数から除いてある。)

	小1年	2年	3年	4年	5年	6年	中1年	2年	3年
A1	20	35	53	51	94	64	90	86	80
2	1	4	3	3	3	2	9	9	6
B1		1	2		2	8	10	10	15
2							3	4	
3								2	
C1		1	1	1	1		2	3	3
2							2		
3							2	1	1
4				1			2		2
総数	21	41	56	54	100	74	120	115	107

<表2>

次に、上の出現数を、阪本一郎『新教育基本語彙』に載せられている形容詞と比較してみた。左の()の数字が『新教育基本語彙』に載っている形容詞の数であるが、教科書の出現数の割合を計算した。Aは、小学校低学年が学習するのが望ましい語彙なのでAの割合だけを載せてある。同様に、小学校高学年はBを、中学生はC

を計算した。それぞれの学年で出現した形容詞が同じものか、それとも異なるものかを調べることも必要と考えるが、今回は、3つの段階ごとの傾向をとらえられればと思い、このような集計とした。

	小1年	2年	3年	4年	5年	6年	中1年	2年	3年
A 1 (1 2 5 語)	1 6 %	2 8 %	4 2 %						
2 (2 5 語)	4 %	1 6 %	1 2 %						
B 1 (6 6 語)				0 %	3 %	1 2 %			
2 (5 2 語)				0 %	0 %	0 %			
3 (2 7 語)				0 %	0 %	0 %			
C 1 (2 7 語)							7 %	1 1 %	1 1 %
2 (2 5 語)							8 %	0 %	0 %
3 (2 2 語)							9 %	5 %	5 %
4 (1 6 語)							1 3 %	0 %	1 3 %

<表3>

以上のことから分かるのは、

- ①形容詞のみの調査だが、教科書に取り上げられている語彙数は全体的に見れば学年が上がるに従っておおむね増加している。
- ②学年にふさわしい語彙の増加という点からすると、その学年で学ぶべき語彙の出現の割合が、あまりにも少ない。小学校の1～3年生で学ぶべき語彙（『新教育基本語彙』で<A>に分類される語彙）で半分にもならず、小学校の4～6年生で学ぶべき語彙（『新教育基本語彙』でに分類される語彙）や中学校において学ぶべき語彙数（<C>に分類される語彙）は、2割にも満たない。

これでは、表現力豊かな表現・理解に大きく関与している「形容詞」の習得はむずかしく、子どもたちの豊かな表現・理解を支える語彙力という点で、問題が多いと考える。

3. 作文の実態

平成14年度に書かれた児童・生徒の作文の分析を行った。分析した作文は、11月に行われた、文化祭的な行事である「竹早祭」の後に書いた小学校2・3・5年の各学年40人の作文と5月に行われた校外学習後（1年生は2泊3日で車山高原方面、3年生は3泊4日で関西方面に行った）に書いた中学校1・3年生各学年84人の作文である。それらの中から形容詞を見つけ出現数を調べまとめてみた。その結果の一部を載せておく。作文に出現した形容詞を、表の学年の欄に○で示した。2回以上出てきても、○1つとしてある。

	小2年	3年	5年	中1年	3年
あいらしい					○
あおい					○
あかい				○	○
あかるい				○	○
あさい					○
あたたかい				○	
あたらしい			○	○	○
あつい (暑い)			○	○	○
あつい (熱い)				○	○
あぶない			○	○	
あまい			○		○
あやうい				○	○
ありがたい				○	○

あわい					○
あわただしい					○
いい	○	○	○	○	○
いいよのない					○
いけない			○		
いそがしい				○	○
いたい	○	○	○	○	○
うさんくさい					○
うすい					○
うつくしい					○
うまい	○	○	○	○	○
うらめしい					○
うらやましい					○
うるさい					○
うれしい	○	○	○	○	○

<表4>

これらを阪本一郎『新教育基本語彙』の分類に当てはめてみる。小学校から中学校になると数が多くなるのは、人数の違いもあるといえるので、一人あたりの出現数も計算してみた。

	小2年	3年	5年	中1年	3年
A 1	23	29	33	93	82
2	1	1	1	6	3
B 1	1			2	11
2		1	1	1	2
3				1	1
C 1				1	
2				1	1
3			1	2	2
4					
総数	25	31	36	107	102
1人あたりの出現数	0.63	0.78	0.9	1.27	1.21

<表5>

これらから分かることは、

- ①全体的な傾向として、学年とともに形容詞の使用数は増えている。
- ②形容詞の使用数が増えてはいるが、学年相応の形容詞の使用数の増加量が少ない。

作文の形容詞使用の実態は、形容詞の習得が表現力の豊かさを支えていることから考え、より多くの形容詞が使用語彙として、子どもたちに獲得させる必要性が大きいことを示していると考える。

4. 授業実践

児童・生徒の実際に使用する形容詞や教科書に出てくる形容詞の数は少なすぎる現状の中で、子どもたちの語彙の中にもっと形容詞を増やしていく指導が大切ではないかと考えた。そこで、小学校4年生と中学校3年生での実践を試みた。

4. 1. 小学校での実践

4. 1. 1. 児童の実態

1学期に取り組んだ単元「あなたらしく 私らしく」では、男を「君」、女を「さん」で呼び分けていること

に関して意見を交換した。その結果、自分とは違う考えをする友達、違う感じ方をする友達に気付いた。そして、子ども達は「君・さん」という言葉に注目することで、違いが明らかになることをきっかけに、言葉のもつ力に関心をもち始めた。

2学期には、「落語、漫才」に取り組んだ。言葉は笑いを生み、人を楽しく、幸せにする。新しい自分や友達に気付かせてもくれる。そうした言葉の力に子ども達は、興味を示し、夢中で活動に取り組んだ。

3学期では、「俳句」に取り組んでいる。

以上のようにこの1年間、言葉を見つめ、言葉の力と向き合ってきた。言葉に対する関心は育ってきている。この時期に、言葉の働きに着目し「かざる言葉（形容詞）」を見つけ出し、語彙を広げていく活動は、4年生の学習の締めくくりとして有効であると考え。クラスの子もたちも興味をもって取り組むことができると思われる。

4. 1. 2. 実践

- ・対象 小学校4年1組 計40名
- ・単元名 「どれがいい？—ものの様子をくわしくする言葉—」
- ・単元の目標
 - 言葉遊びを通して、形容詞の働きに気付く。
 - 形容詞をたくさん使ってお話を作る。
- ・教材

『言葉図鑑③かざることば (A)』五味太郎作 偕成社 1986年4月1日

- ・教師の願い

言葉に関心を持ち、言葉のもつ力について、追求してきた一年であった。その締めくくりであるこの時期に、言葉の法則性に気付き、言葉の構造の一部を学習することは、大切だと考える。

また、一つの名詞が、形容詞を変えることで、そのイメージをがらりと変えていく、その変化こそ形容詞のもつ力だと思う。五味太郎さんの「ことばの図鑑」の魅力をばねに、形容詞の力に気付き、自ら形容詞を見つけ、使っていけるようにしたい。

しかし、4年生ということを考え、形容詞、形容動詞、連体詞などの品詞分類はさけ、「飾る言葉」と大きく形容詞をとらえ、文作りをするなかで、違いを感じ取ることを期待している。

- ・学習の実際 (全3時間)

主な学習活動	指導事項	評価計画 ■評価基準☆評価方法◇支援
1. どれがいい？	○教師の提示する言葉遊びを楽しみ、学習に対する意欲をもつ。 例) かわいい帽子、美しい帽子、大きい帽子、小さい帽子。かぶるならどれがいい？ 最近、話題になっている魔法使い。おそろしい魔法使いや、貧しい魔法使い、きたない魔法使い、そそっかしい魔法使いならどれがいい？	◇言葉の意味が十分に理解できない児童のために、五味太郎「言葉図鑑」のイラストを問題と一緒に見せる。
	○かざる言葉を使って、友達がどれがよいか迷うような問題を作る。	■問題を作り、形容詞の働きに気付く。

	<p>(例) かわいらしい赤ちゃん、いさましい赤ちゃん、あいらしい赤ちゃん、かしこい赤ちゃん</p> <p>○同じグループの友達と問題を出し合い、言葉の違いによって変わるイメージを楽しむ。</p> <p>○数名の児童に作った問題を発表してもらい、感想を話し合い、かざる言葉の働きに気付く。</p> <p>○作った問題を発表し合い、かざる言葉の働きに気付く。</p>	<p>☆児童の作品</p> <p>◇かざる言葉が見つけれない児童には、教科書や『言葉図鑑—かざることば (A)』の表紙などを利用することを勧める。</p> <p>◇形容動詞、連体詞などが混じってしまっても、この時点では、「かざる言葉」として認める。</p>
<p>2. かざる言葉をたくさん見つけよう。</p>	<p>○問題で使ったかざる言葉を整理分類し、「い」で終わる言葉（形容詞）に気付く。</p> <p>「い」で終わる言葉（形容詞） かわいい、うつくしい、大きい、小さい、そそっかしい …… それ以外の言葉 やせている、ふけている 一文なしの、貧乏な</p> <p>○カードを分類、整理し、反対の意味の言葉、対になっている言葉から、形容詞を見つけ、語彙を増やす。</p> <p>○さらに、教科書、国語辞典などから形容詞を見つけ、プリントに書き出す。</p>	<p>■形容詞を見つけ、語彙を増やす。</p> <p>☆児童の発言、反応、作品</p> <p>◇作業が進まない児童には教師と一緒に作業を進める。</p>
<p>3. かざる言葉をたくさん使ってお話を作ろう。</p>	<p>○プリントに書き出した言葉を使って、「どれがいい？」の問題を作り、意外な組み合わせから、新しい意味を生み出すことを楽しむ。</p> <p>○プリントに書き出した言葉をたくさん使ってお話を作る。</p>	<p>■見つけた形容詞を使う。</p> <p>☆児童の発言、反応、作品</p> <p>◇気に入った言葉を挙げさせ、その言葉を組み合わせることができる話を一緒に作る。</p>

4. 1. 3. 成果と課題

五味太郎「言葉図鑑」のイラストは、4年生の言葉への関心を大きく揺さぶった。しかも「どれがよいか迷うような問題」という問いかけも、興味をかきたてた。こうした働きかけは、子どもの主体的な活動を引き出す上で有効であった。

また、子ども達が問題作りで使用した言葉は、形容詞という枠組みを大きく超え、形容動詞、連体詞はもちろん、動詞、副詞、そして複合語まで駆使していた。日常会話や作文では使わないが、知識としてもっている言葉は予想外に多かった。さらに、使われた言葉をもう一度振り返り、共通点（「い」で終わる言葉）を見つけ出す児童もいた。文の法則性を発見する力は、大切な言葉の力であると考えられる。

そして、形容詞を探することで、今まで使わなかった言葉を意識させると同時に、初めて出会う言葉にも関心をもたせることができた。子ども達の語彙を広げるよい機会とすることもできたと思われる。

今後も、子どもの語彙力を伸ばすために、言葉の働きに着目する学習を定期的に行うことは重要であると考えられる。そして、子どもの発達に応じた語彙学習の系統を研究し、竹早地区における語彙指導のカリキュラム作成に取り組む必要性を感じている。

4. 2 中学校での実践

4. 2. 1 生徒の実態

第3学年は1クラス41～43名で、ほぼ男女同数の4クラス編成。(そのうち約半数が附属小学校からの内部進学者であり、15名が帰国生徒枠による入学者、残りが一般試験による者である。)全体として明朗活発であり、知的好奇心も旺盛である。しかし、個人の興味関心に合致するかしないかで、授業への取り組みの姿勢が決定される傾向にあると予想されるので、授業設計には工夫を凝らす必要がある。

4. 2. 2 実践

・対象と位置づけ

中学校3年：特設単元

・単元名 形容詞に着目した授業実践〈ワードハンティング ～タイプ形容詞～〉

・単元の目標

○形容詞について再確認する。

○形容詞を意識した作文を行う。

・教材

○教科書口絵「昔の田子の浦」(『中学校国語3』学校図書)

できるだけ単純なモチーフの写真を選んだ。

○『旅の絵本』(安野光雅著 福音館書店 1977年初版)

字のない絵だけの絵本でありながら、風景や人物がかなり細かく描写されているところから、言葉を探し出して作文を行うのには適当であると考えた。また、この本は続編が出されており、本年には『旅の絵本VI』が出版されている。しかし、『旅の絵本』～最新刊まで検討した上で、『旅の絵本』が、何気ないが多彩な人物が描き込まれており、適当であると判断し、教材に選定した。

・学習の展開(全2時間)

学習課題と評価の観点	学習内容	活動内容	活動形態	つきたい力
<ul style="list-style-type: none"> 形容詞を含んだ短作文が書ける 形容詞の働きを理解する できるだけ多くの形容詞を書き出せる 形容詞を分類できる 	<p>〈第1時〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ①教科書の口絵「昔の田子の浦」を見る ②描かれているものについて、短作文を行う ③形容詞について確認する ④具体的に形容詞を書き出す <ul style="list-style-type: none"> 付箋に1枚1語で書く 個別→5、6人のグループ(座席ごと)に分かれる。 白紙に貼付していく メンバーの語を見て思いついたものも書いて貼付する(付箋の色を変えて区別する) ⑤集めた形容詞のグループ分けを行う 	<p>発表</p>	<ul style="list-style-type: none"> クラス 個別 クラス 個別 グループ 	<ul style="list-style-type: none"> 形容詞の獲得語彙を増やすことができる 学習指導要領〔言語事項〕(1)語彙についての指導 第2学年・第3学年指導事項ウ

	<ul style="list-style-type: none"> ・辞書で確認しながら正しくないものは除外していく ⑥グループのワークシートを黒板に掲示し、全体で確認する ⑦感想、評価 ・個別にプリントに記入し提出 	話し合い 相互批評 振り返り	グループ クラス	
<ul style="list-style-type: none"> ・できるだけ多くの形容詞を発見し、書き出せる ・形容詞を用いて、正しくかつ効果的に短作文が書ける 	<p>〈第2時〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ①前時に回収した個別のプリントとグループのワークシートについて、簡単にコメントを述べる ②『旅の絵本』のカラーコピーを掲示。 <ul style="list-style-type: none"> ・形容詞を探すための、自分の好きな場面を選択する。 ③できるだけ多くの形容詞を発見する。 <ul style="list-style-type: none"> ・モノトーンで印刷されたプリントとワークシートに書き込んでいく。 ・一つの場面に複数の形容詞でもよい。 ④形容詞を用いて短作文を行う。 <ul style="list-style-type: none"> ・発表に値する言葉であるかどうかを考えて選択する。 ⑤グループで代表を選抜し発表する。 <ul style="list-style-type: none"> ・できれば一つにしぼる。 ⑥感想、評価 ・個別にプリントに記入し提出 	話し合い 相互批評 振り返り	クラス 個別 個別 個別 グループ	<ul style="list-style-type: none"> ・正しくかつ効果的に形容詞を用いて文章を書くことができる <p>学習指導要領 〔言語事項〕 (1)語彙についての指導 第2学年・第3学年 指導事項ウ</p>

4. 2. 3. 成果と課題

文法の授業はともすれば無味乾燥になりがちで、生徒からも敬遠されてしまう傾向にあるが、今回は特設授業であったこともあり、まず興味関心の向き方が大きく違った。生徒は第1時の導入から集中して取り組み、最後まで意欲を持ち続けていた。

品詞の特性や文における役割理解に重点が置かれる中で、形容詞という一つの品詞を取り上げて、その機能や役割を実感する体験は特殊なものであり、意欲付けとしては成功したと思われる。授業の工夫について以下に述べる。

まず、導入として美しい富士山の写真を見て短作文を行い、形容詞を一切排除した例文と比較することで、形容詞の働きの重要性を情緒的な部分からも実感させた。そこから形容詞の機能を確認し、分類していく活動にスムーズに進むことができた。第1時を踏まえて、『旅の絵本』の中の場面から形容詞を探し出す活動を行ったが、カラーコピーを提示したことで美しい絵本であることが生徒の心に響いたこと、グループで競わせたことなども功を奏し、継続して高い集中力を示した。色とりどりの付箋を用いたり、単元名にも生徒が立ち止まるような名付けを意識したり、ワークシートにも生徒の生活言語にそったものも取り入れた。文字からだけではなく、視覚

的、情緒的なものを意識的に組み込み、多彩な活動を心がけた。

ただ、実際には形容詞の獲得語彙の増加を生徒個々に具体的に定着させることができたかといえば、その機能を正しく理解して用いるということも併せて詰めが甘かったと言わざるを得ない。それは一つには時間の問題がある。特設單元ということで2時間で設定したが、形容詞の確認と語彙の獲得、適切な用法の3点をカバーするには、もう少し内容の精選が必要であり、時間がまったく足りなかった。生徒は精一杯取り組んだので、そちらのロスはほとんどなく、これは授業者の設計ミスである。また、形容詞の分類の段階で、その分類基準の提示がなかったことから作業が難しかったこと、形容詞であるかどうかの正否についての確認が辞書による生徒の自己判断に委ねられたことで、ミスがいくつか見られたこと、短作文の作成を生徒が楽しんで行っていたのだが、適当な時間を確保することができず、中途半端になってしまったこと、いずれも改善の工夫が要される課題である。

時間に余裕のある生徒に課した形容詞を意識した散文の創作は、数名の生徒によって自主学習の形で後日提出されたが、一つの品詞から自ら学び考える可能性を示唆した実践であったと考えている。

5. 今後の課題

4年間にわたり、形容詞に着目した調査、集計、分析、そして授業実践を行ってきたわけであるが、この研究を通して明らかになってきたことは、次の3点である。

①児童・生徒の語彙力は、形容詞でみる限り、学年段階にふさわしいレベルに到達していない、という実態がある。

②児童・生徒をめぐる言語環境は、形容詞でみる限り、語彙力の低下に拍車をかけている、という実態がある。

③語彙を増やす授業は、教材選びの工夫、教材の提示方法の工夫、さらに、活動の手だての工夫により、子どもたちの学習意欲を引き出し、言葉の表現性にまで目を向けさせることが可能であると考ええる。

しかし、これらの結論は、形容詞というひとつの面からの分析である以上、今後の課題は、

- ・形容詞で行ったような調査・分析を、他の品詞でも行ってみること。
- ・語彙指導の時間を、強化指導全体の中で、どのように位置づけていくのか、を検討していくこと。

の2点が残されていると考える。

参考文献

1) 阪本一郎「新教育基本語彙」

昭和59年

学芸図書